



内蒙古自治区・フフホト市の都市形成と民族別居住 分化：新中国成立以前の動向

邱, 秀峰

(Citation)

兵庫地理, 52:29-37

(Issue Date)

2007-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002458>



内蒙古自治区・フフホト市の都市形成と民族別居住分化

—新中国成立以前の動向—

邱 秀峰

1. はしがき

中国の都市地理学研究において、都市内部の地域構造に関する研究は、改革・開放期以降、隆盛化しつつあるが、それらは主に沿海地域の大都市を対象としている。虞（1986）、許ほか（1989）、薛（1996）は上海、広州、北京 3 市の因子生態分析を行い、西側諸国の都市と共通する教育、職業、年齢などの主因子を抽出し、幾つかの社会地区の存在を明らかにした。胡・福（1994）、周（1996）、寧・鎧（1996）、周・孟（1997）は北京、上海、広州、天津、瀋陽、大連などの大都市の人口統計を基に、都市内部の地域構造の変容に関する研究を行い、これらの大都市はすでに郊外化過程の段階にあることを指摘した。また、胡（1993）は広州をとりあげ、工業による郊外化の進展について論じた。加えて、都市内部における新しい商業中心地の変遷や特徴、問題点などの研究も増加しつつある（徐，1984、Yang，1991、寧，1984、呉，1988）。

以上のように、沿海地域の大都市をとりあげた研究が多く、内陸地域、特に少数民族地域の都市はほとんどその対象となっていない。とりわけ、民族文化や民族間の社会関係を視野に入れ、都市の地域構造や変容を扱った研究はあまりない。その理由として 2 つの点が考えられる。1 つは、改革・開放政策実施以降、沿海地域の都市発展、変容が著しく、都市研究者の関心・注目が集まっていることである。もう 1 つは、目覚ましい経済発展を遂げつつある沿海地域の大都市では、統計資料が優先的に整備されたのに対して、内陸都市に関する統計資料は極めて少なく、都市研究に利用できる統計データは限定されていることである。そのため、研究テーマも、統計資料が利用可能な分野に集中している。

そこで、筆者は中国の内陸の少数民族地域の都市

として、内蒙古自治区の首府^①・フフホト市をとりあげ、新中国成立以前における各民族の流入とその居住分化傾向に注目しつつ、主に『呼和浩特市志』（1999 年版、呼和浩特市地方志編修辦公室）、『呼和浩特文史資料』（内蒙古档案局）、『内蒙古文史資料』（同）の歴史的資料に依拠しながら、フフホト市の都市形成について検討を加える。なお、一部の民族に関しては、その流入期との関連で新中国成立以降についても論及する。

2. フフホトの概況・沿革

フフホトは、モンゴル語で「青い城」を意味し、中国・内蒙古自治区の首府である。2005 年現在、4 区（玉泉区、新城区、回民区、賽罕区）、4 県（托克托県、武川県、和林格尔県、清水河県）、1 旗（土默特左旗）を管轄している（図 1）。2001 年現在、フフホトは自治区の直轄市として、総面積は 17,224 平方キロメートル、総人口は 211.8 万人、市区人口は 108.4 万人、非農業人口は 95.9 万人である。現在、漢族は総人口の 87.5%を占め、185.4 万人であるのに対して、蒙古族、回族、満族などの少数民族は 26.4 万人であり、総人口の 12.5%を占めている。

フフホトの都市形成の起源は 1565 年に始まる。同年、土默特蒙古族の首領・阿勒坦汗（俺答）^②が支配地域に流入した漢族を定住させるために、漢族式の城郭都市「板升」^③を建設し始めた。1571 年に阿勒坦汗は明朝政府と講和し、順義王の称号を与えられ、国境沿いで貿易を行うことを認められた。1575 年、フフホトは庫庫和屯^④と表記され、明朝政府によって「帰化^⑤城」（現旧城地区、図 2）の名が与えられた。その後、同城は明から蒙古高原への物資の集積地として栄えた。また、阿勒坦汗は晩年に達頼ラマに帰依してチベット仏教に改宗したため、

帰化城には数多くのラマ教寺院が建設され、オルドス高原^⑥の精神的中心地となった。

図1 フフホト市4区、市轄旗・県



1. 玉泉区 2. 新城区 3. 回民区 4. 賽罕区
呼和浩特市政区図（西安地図出版社、2006年）より作成

土黙特蒙古族が対明朝貿易の利権を独占したため、その取引拠点である帰化城は急速に発展するが、1628年に同城の主導権を察哈尔蒙古族の陵丹汗に奪われた。陵丹汗の病死後、満族の後金が帰化城を占領し、内蒙古全域を支配して1636年に国号を清と改めた。清朝政府は、帰化城の北東隣に「綏遠城」（現新城地区、図2）を築き、オルドス地方の防衛を担当する八旗軍の駐留地とした。帰化城と綏遠城はあわせて「帰綏」と呼ばれ、清代以降、中央政府の直轄地として内蒙古の政治、経済、文化の中心地となった。その後、1913年に帰化県から帰綏県に改称され、1950年に市に昇格してフフホト市となった。

現在、フフホト市は内蒙古自治区の首府であることから、蒙古族の集住都市としてのイメージが強いが、実際には漢族をはじめ、蒙古、回、満など計34

の民族が居住している。フフホトは原住民である土黙特蒙古族が造った都市とはいえ、時代の変遷に伴い、多くの他民族が流入・定住してきた。そこで、筆者は蒙古、漢、回、満の4主要民族をとりあげ、各民族の流入時期及びその居住分布の変遷を解明し、新中国成立以前の都市形成を民族別居住分化の側面から検討する。

3. フフホトの都市形成と民族別居住分化

(1) 蒙古族と帰化城

① 原住民としての土黙特蒙古族

元が明によって滅され、元朝最後の順皇帝が長城の北部へ逃れた後、蒙古各支族の分裂状態がしばらく続いたが、達延可汗が各支族を再統合し、支族ごとに土地、牧畜地を再分配した。達延可汗の孫である阿勒坦汗は、蒙古の一支族・土黙特蒙古族を卒いて豊州灘（現在のフフホト地区）に駐留していた。

当時、土黙特蒙古族は12土黙特と呼ばれ、12の支部からなっていた。その中で、7支部は雲碩布氏族を主体として編成され、残りの5支部は一部の雲碩布氏族、他の氏族、少数の漢族から構成されていた。明代末期から清代初期にかけて、各支部の居住状況を基に、12土黙特が12甲朗と改名され、更に左右両翼、計60蘇木^⑦と再編成された。

現在でも土黙特蒙古族の主要な居住地域はフフホト市西部から薩拉奎県にかけて展開し、それに対して托克托県・和林格尔県・清水河県などフフホト市の東部地域にはやや少ない（栄・栄、1981）。また、上述したように、土黙特蒙古族の主体が雲碩布氏族であるため、「雲」という名字の住民は現在、これらの地域に多く居住している。このように、15世紀頃の蒙古族の居住分布が現在の蒙古族の居住分布の基本となっている。

② 帰化城の特性と居住状況

フフホトは「城」として1575年（明万暦三年）に誕生した。1572年（明隆慶六年）、阿勒坦汗の命令にて着工し、4年間かけて周長約2里弱、城壁の高さ約2丈4尺、南北2門の「城」を完成し、庫庫

和屯と命名され、1586 年（明万曆十四年）に明朝政府によって帰化城と賜名された。

帰化城の内部構造をみると、内城は順義王府（都統府）を中心とした王府家城⁸⁾であり、土黙特蒙古族の統治階級による権力の中心地であった（栄・栄、1981）。また、1573 年（明万曆元年）から同王府の南部には多くのラマ教寺院が建設され、1727 年（清雍正五年）までに 9 寺が完成した。初期の帰化城には王府、行政、宗教、文教施設以外の建物は少なく、大半が空き地であった。このような状況は蒙古族以外の民族が帰化城に流入する前のものであり、帰化城は蒙古文化・思想に強く影響された構造をもつものであったといえよう。

1696 年（清康熙三十五年）、清朝政府は防衛力を強化するため、内城の東、西、南の三方面に城壁をめぐらし、外城を築城し、「凸」字型の帰化城が完成した。内外城郭の総面積は 0.2 平方キロメートルであり、現在の大南街街道辦事処の管轄エリアに相当する。その結果、帰化城が完成する前から城外に居住していた蒙漢商人や職人などが城内の住民となった。

さらに、1868 年（清同治七年）、甘肅省の回族による反清大暴動が起こり、戦場が帰化城へも迫ってきたため、清朝政府は同城の外縁に仮泥城壁を作り、回族の反乱に備えた。反乱終息後、清朝政府は仮泥城壁を取り壊し、城外北部の地域も同城内となり、帰化城域を拡大した。

③ 東部蒙古族の流入と定住

東部蒙古族は現在の中国・東北地方と内蒙古自治区・東部地方の出身の蒙古族をさす。彼らのフフホトへの主な流入時期は 2 回であった。1 回目は 1739 年（清乾隆四年）、綏遠城の建設に伴い、東北地方に居住していた約 500 人の蒙古族を清朝八旗軍人として同城へ駐留させた時である。彼らの多くは退隊後も、家族と一緒に綏遠城に定住し続けることとなった。

2 回目の流入期は 1954 年、内蒙古の首府が自治区東部にあるウランホト市からフフホト市へ移っ

た時である。その流入期には、共産党や政府各機関、企業・単位の東部蒙古族は家族を伴い、フフホト市・新城地区の単位集合住宅に居住してきた。その後、彼らの親族も同地区へ流入、定住したのに対して、土黙特蒙古族は依然旧城地区に居住していた。

呼和浩特市地方志編修辦公室（1999）によると、原住民である土黙特蒙古族に加え、東部蒙古族の流入があったにもかかわらず、清代半ばから 20 世紀 40 年代にかけて市内 3 区における蒙古族人口は、漢、回、満の 3 民族より少なかった（表 1）。その原因として、遊牧民族である蒙古族は都市での定住性が低かったことがあげられる。また、後述するように、都市定住性の高い漢族の流入があったため、蒙古族の人口構成比が相対的に著しく低下したことも指摘できよう。表 1 をみると、1949 年にフフホト市内 3 区における漢族の人口数が蒙古、回、満の 3 民族を大きく上回っていたことがわかる。

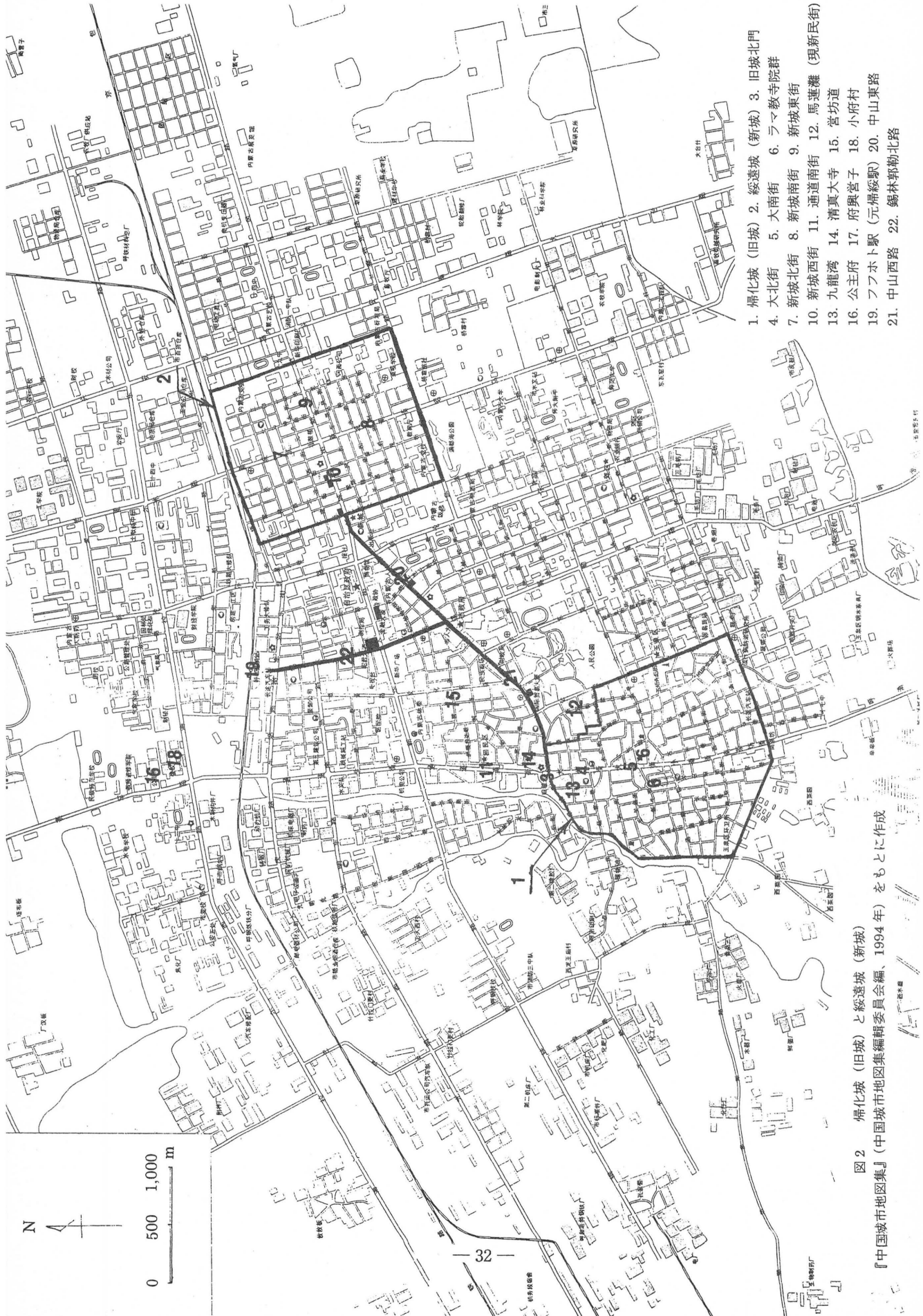
(2) 漢族の大量流入と定住

漢族の大量流入期は明代と清代の 2 時期である。

第 1 次流入期の明代には、明と蒙古が対立状況にあったため、明朝政府による辺境の警備が強化され、漢族の蒙古地域への侵入は厳しく制限されていた。このような状況においても、ある一定数の漢族が以下の背景により、辺境を越えて蒙古地域へ流入した（栄・栄、1981）。

- ① 明朝における一部の犯罪者は、密かに蒙古地域へ逃亡した。
- ② 明朝軍と戦争した時、大量の漢族が蒙古軍に連行されてきた。
- ③ 阿勒坦汗は明朝政府と和解した後、明の辺境から漢族の職人を招聘し、既に定住していた漢族住民とともに築城やラマ寺院造りに従事させた。
- ④ 帰化城は商業中心地になり、多くの漢族商人が同城に定住した。

第 2 次流入期の清代に入り、清朝政府は国を再統一し、北方の蒙古地域も清の領域に入ることとなった。明代に比べて、漢族の長城を越えての移



1. 棉化城 (旧城) 2. 綏遠城 (新城) 3. 旧城北門
4. 大北街 5. 大南街 6. 羊馬教寺院群
7. 新城北街 8. 新城南街 9. 新城東街
10. 新城西街 11. 通道南街 12. 馬蓮灘 (現新民街)
13. 九龍灣 14. 清真大寺 15. 營坊道
16. 公主府 17. 府興營子 18. 小府村
19. フフホト駅 (元棉綏駅) 20. 中山東路
21. 中山西路 22. 錫林郭勒北路

图2 棉化城 (旧城) 和綏遠城 (新城)

『中国城市地图集』(中国城市地图集編輯委員会編、1984年)をもとに作成

表 1 1949 年フフホト市市区における人口の民族比例構成

地区別	総人口	漢族		蒙古族		回族		満族	
		人口	%	人口	%	人口	%	人口	%
新城区	28,447	25,246	88.8	934	3.3	411	1.4	1,780	6.3
回民区	42,058	33,003	78.5	184	0.4	8,761	20.8	110	0.3
玉泉区	53,464	52,380	97.9	369	0.7	374	0.7	341	0.6

呼和浩特市人口普查辦公室資料より作成

動に対する制限は緩和され、多くの漢族が蒙古地域に流入することとなった。すなわち、この時期、蒙古地域における寺院の修繕、農地の開拓、商売のため、清朝政府は政策的に漢族の人口流動に対する制限を解除した。そのため、多くの山西商人が帰化城へ往来し、定住したため、山西方言を基に、フフホト独自の方言や風習が形成された。また、満州八旗軍が綏遠城に駐留した後、清朝政府は計画的に中原地域の漢族農民を同城に転入させ、漢族は帰化・綏遠両城及びその周辺地域に広く分布する状況となり、その結果、蒙古族人口を大幅に上回ることとなったのである。

上述のように、清代以降、山西北部と中原地域の漢族商人、農民の流入は政策的に展開されたものである。民国時代に入ると、鉄道や道路網の整備によって、更に人口流動に関する制限が軽減されたため、大量の漢族がフフホトへ移動し、漢族人口は他民族人口を更に大きく上回ることとなった（呼和浩特市地方志編修辦公室、1999）。

漢族の居住状況をまとめると、明代から清代にかけて、漢族は帰化城、綏遠城及び両城の周辺部に広く居住しており、主に両城の周辺部で農業を営み、帰化城南部で商売や手工業に従事していた。帰化城には蒙古・漢両民族の商売取引場があったが、清代に入り、同城南門外にも取引市場が設置され、塞外⁹⁾の商業中心となって繁栄した。また、帰化城の北門から南門までの大北街、大南街、ラマ教寺院群周辺の空き地において、山西商人をはじめとする多くの漢族商人は商号店舗を開設し、外蒙古や新疆地方への長距離取引を行い、自由市場も形成され、清代末期になると、大北街、大南街、ラマ教寺院群周辺

は漢族を主体とした街区となった。

一方、綏遠城においては、漢族は主に満族軍官下の兵卒として兵器を製造する仕事に従事し、定められた場所に居住していた。その後、江南地方から一部の漢族「師爺」（文人先生）が招聘され、現新城南街西の通称「江南館巷」の胡同に居住していた（佟、1992）。また、清朝政府は綏遠城の経済を発展させるため、山西と河北から漢族の職人や商人を転入させ、当時同城の東、西、南、北四大街道に 1,500 余りの店舗を建設した（劉、1995）。

(3) 回族の流入と回民区の形成

回族の流入は主に 3 つの時期に分けられる。即ち、清代初期（康熙年間）、清代半ば（乾隆年間）、清代後半期（同治、光緒年間）である（政協回民区委員会、1994）。

第 1 次流入期は明朝の滅亡後、山西・河北に駐留していた回族兵が清朝に投降し、帰化城とその周辺部へ移動してきた時期である。

この時期、厄魯特蒙古族の葛尔丹汗が新疆などの北西内陸部を含めた広大なモスリン（回族）地域を支配していた。また、同時期に帰化城とその周辺部は塞外の交通拠点、商品の集積地として発展してきたため、清朝政府は同城を北西内陸地域の住民と中原地域の住民間の商売・貿易地と指定した。そこで、新疆、陝西、甘肅、寧夏、青海の回族商人も、帰化城とその周辺部へ移住し、零細小売業に従事した。

1690 年（清康熙二十九年）、葛尔丹汗による大反乱が起こったが、清朝政府に鎮圧され、葛尔丹汗の支配地域の住民の帰化城への移動は厳しく制限された。さらに、帰化城に移住した回族商人が清朝政

府に同城北門外へ追放され、その後、彼らは北門外の通道南街周辺で清真大寺（モスク）を建設し、その付近に集住した。また、清代雍正年間、山西大同、陝西西安の回族商人、清真（牛、羊肉）飲食業者が帰化城東門外の馬蓮灘（現新民街）、同城内北西部の九龍湾へ移住し、それに伴い、馬蓮灘に清真東寺、九龍湾に清真南寺が建設され、その周辺は回族の集住区域となった。このように、帰化城内外の通道南街周辺、馬蓮灘、九龍湾の3つの地区が回族居住区を形成することとなった。

第2次流入期は清代半ば頃であった。1760年（清乾隆二十五年）、新疆天山南路イスラム教徒の大、小和卓反乱の平定後、清朝に帰順した香妃一族と200～300人の回族護衛兵が清朝政府の招聘を受け、帰化城外南部の八拝地方に定住し、清真寺を建設し、その後、帰化城内へ移住した。また、北京、天津、河北の滄州、保定、石家庄、河南の孟県、山東の德州、済南などの東部回族商人と清真飲食業者は商業活動を拡大するため、塞外の交通拠点、商品の集積地であった帰化城の営坊道周辺へ移住し、新たな回族居住区が形成され、その後、清真西寺を建設した。一方、同じ時期に綏遠城への流入も認められ、彼らは同城南門口の城壁の西部に設置された牛羊屠殺場である「羊圈巷」の周辺に居住し、主に清真飲食業を営んだ。

第3次流入期は19世紀初期から辛亥革命までの100年余りの間である。中原地方及び西北各省における一部の回族が帰化・綏遠両城へ流入してきた。特に白彦虎・馬化龍を中心とした回族大暴動が清朝政府に鎮圧され、陝西、甘肅、寧夏に居住していた回族の多くは帰化・綏遠両城を含む各地へ離散し、清真飲食業に従事した。清代光緒初期には、両城における回族人口は大幅に増加し、およそ3,000～4,000人に及んだ。民国以来、東部回族の流入はやや減少したのに対して、甘肅、寧夏などの西部回族は断続的に流入した（丹、1994）。

回族の居住特性は、「教坊制」と呼ばれるイスラム教の思想に基づく居住地域制度を基礎としている。すなわち、回族にとって日常生活の中で最も重

要な存在である清真寺を核として、その周辺地域に集住するパターンである。今日でも、フフホト市・回民区は「教坊制」に従い、清真大寺を核として、北寺、西寺、東寺、南寺を中心に、それぞれの周辺地域に回族の密集居住区が形成されている。

（4）満族の流入と綏遠城

佟（1992）によれば、フフホトへの満族の流入は主に3つの時期に分けられる。まず、第1次流入期は17世紀末期（清康熙年間）であり、清朝政府は約3,580人の満族犯罪者を流刑に処し、帰化城のラマ教寺院へ送り込んだ。

第2次流入期は1697年（清康熙三十六年）であった。この時、清朝康熙帝は対立していた衛拉特蒙古族と和親¹⁰し、四女の恪靖公主を同蒙古族の土謝図汗の息子と成婚させた。それに伴い、公主とその同行人が帰化城外南部の清水河付近に居住し始めた。その後、帰化城が安定期に入り、同城北郊で公主府が建設され、次いでその周辺に府興営子や小府村などの村落が造られ、清水河から大量の満族住民が移住し、満族人口は更に増加した。

第3次流入期は綏遠城を建設した後、即ち1737年（清乾隆二年）からであった。清朝政府は統治基盤を強化するため、辺境の防衛兵力を拡大し、帰化城の東部に綏遠城を建設した。同城は漢族式の城郭都市構造を基に造られ、1739年（清乾隆四年）に完成し、周長は9里13歩である。城内での満族の居住状況は、満族の前身である女真族固有の軍事思想に基づく八旗制に従い、正黄・鑲黄・正白・鑲白・正紅・鑲紅・正藍・鑲藍の八旗軍の階級関係によってその居住区が異なっていた（佟、1992）。すなわち、八旗軍は「旗」ごとに、北部には正黄・鑲黄2旗、東部には正白・鑲白2旗、西部には正紅・鑲紅2旗、南部には正藍・鑲藍2旗のように定められた地区に駐留し、その家族も同住した。このように、第3次流入期は八旗軍とその家族の流入期であり、この時期に綏遠城へ流入した満族は15,000人を上回ったといわれる。また、満族流入の特徴をみると、漢、蒙古、回の3民族と異なり、組織的集団的に綏

遠城へ流入してきたといえよう。

1911 年、辛亥革命により、清王朝が終焉し、綏遠城における満族人口も急減することとなった。民国初期から 1949 年頃にかけて、綏遠城の満族人口は 1/6、すなわち、2,000 人弱にまで減少した。満族人口が急減した主な原因として佟（1992）は下記の諸点を指摘した。

- ① 辛亥革命後、満州八旗兵の元蒙古族が民族復帰することとなった。
- ② 清王朝が終焉した後、漢・満両族の通婚が急増し、戸籍を登録した時、一部の満族が民族成分を漢族で申告することとなった。
- ③ 満・蒙古両族の通婚も急増し、戸籍を登録した時、一部の満族が民族成分を蒙古族で申告することとなった。
- ④ 日本軍が中国で満州国を建設し、約 2,000 人の満族が東北地方へ流入することとなった。
- ⑤ 民国以降、漢族の統治階級復帰により、清代に満族の絶対的な優越性が消滅したため、多くの満族が民族成分を漢族で申告することとなった。

4. むすび

本稿は、新中国成立以前における蒙古、漢、回、満の 4 民族人口のフフホトへの流入と民族別居住分化に注目し、同市の都市形成について検討を加えたものである。

1575 年（明万曆三年）、帰化城が建設されたが、王府とその南部にあるラマ教寺院群以外のは大半は空き地であり、都市定住性の低い蒙古族以外の民族が城内に流入する前の帰化城は、蒙古文化・思想に強く影響された構造をもつものであった。その北東部に清朝政府により、八旗軍の駐留地として建設された綏遠城は、漢族式の城郭都市構造を基に、居住区域が八旗軍の階級関係によって定められるものであった（佟、1992）。帰化城の周辺部には商業の中心地として店舗、自由市場が置かれ、主に漢族の集住地であった。また、帰化城北門外における清真寺周辺部は回族の居住区であった。このように、民

族別の居住分布状況は明朝と清朝政府の政策によるところが大きいと考えられる（近藤、1996）。

フフホトは多くの民族の流入を経て形成された都市である。原住民の土黙特蒙古族以外の蒙古族は主に内蒙古東部地方や中国東北地方から、漢族は主に華北地方や東北地方から、満族は主に北京や東北地方から、回族は主に西北地方や華北地方から、それぞれ流入してきた。民族の流入時期をみると、東部蒙古族も漢族も主に 2 回にわたって流入したのに対して、回族と満族はそれぞれ 3 回ずつ流入した。

東部蒙古族の最初の流入時期は 1739 年（清乾隆四年）であった。流入の要因としては、綏遠城の建設に伴い、東北地方に居住していた約 500 人の蒙古族を清朝八旗軍人として同城へ駐留させ、彼らの多くは退隊後も、家族と共に同城に定住し続けることになった。次の流入時期は 1954 年であり、内蒙古の首府がフフホト市へ移った時、共産党や政府各機関、企業・単位の東部蒙古族は家族を伴い、新城地区の単位集合住宅に居住してきた。

一方、漢族が初めてフフホトへ大量に流入した時期は明代であった。明代初期、漢族犯罪者の蒙古地域への逃亡、明朝辺境付近の漢族住民の蒙古軍による連行など、漢族の流入がみられたが、大量の流入は明朝・蒙古両政府が和解した後であり、多くの漢族職人が蒙古地域へ招聘され、築城やラマ寺院造りに従事した。漢族の 2 度目の大量流入は清代であり、清朝政府は蒙古地域における農地の開拓や寺院の修繕などのため、政策的に漢族農民を流入させた。また、山西などの漢族商人も塞外の商業中心地である帰化城とその周辺部へ多数流入した。

他方、清代には回族が 3 回にわたって帰化・綏遠両城へ流入した。その要因としては、この時期、帰化・綏遠両城は西北地域～華北地域、辺境地域～中原地域における重要な交通拠点と商業中心地であり、回族が商業活動を拡大するため、両城へ流入し、商業、零細小売業、清真飲食業に従事したと考えられる。

最後に、満族の流入時期は全て清代である。1 回目の満族犯罪者の流刑、2 回目の衛拉特蒙古族との

和親、3 回目の八旗軍の綏遠城への大量駐留によるものであり、いずれも漢、蒙古、回の3民族と異なり、組織的・集団的に同城へ流入してきたものといえよう。

付記

本稿は2006年8月の兵庫地理学協会夏季例会において発表した内容に加筆修正を加えたものである。本稿を作成するにあたり、神戸大学大学院人間発達環境学研究科の山崎健教授にご指導を頂きました。記して厚くお礼を申し上げます。

注

- 1) 中国の行政区分は23省(台湾省も含む)、5自治区、4直轄市、2特別行政区である。省政府所在地は省会、自治区政府所在地は首府と呼ばれている。
- 2) ア勒坦汗(俺答)本人と彼の一族は土默特蒙古族ではなく、チンギスハーンの支族、孛児只斤蒙古族であった。土默特蒙古族は雲碩布氏蒙古族とも言われる。
- 3) 板升とは、中国語の「百姓」(＝庶民)の音訳で、遊牧民のゲルに対して、定住農民の家屋を指した語である。
- 4) 庫庫和屯(フフホト)はモンゴル語である。漢訳は青い城、通称「青城」である。漢族は類似発音の「呼和浩特」にて表記する。
- 5) 帰化とは、帰順教化の意味である。明朝政府は蒙古を従属国として看做し、「帰化」と賜名した。現在、帰化城は現在玉泉区の一部となっている。
- 6) オルドスは、近世以降にあらわれるモンゴル遊牧民の部族集団。この集団が明代以降、中国の黄河屈曲部(「河套」)～フフホトの辺りに居住していた。同地域の西部は現在オルドス高原と呼ばれ、内蒙古自治区のオルドス市が置かれている。
- 7) 1蘇木＝150戸。
- 8) 王府家城とは、統治者の私邸兼官邸(行政機関)の集中する地区である。
- 9) 長城北部における広範な地域を「塞外」という。
- 10) 和親とは、中国の封建王朝が周辺各民族と姻戚関

係を結んで平和を保つことをいう。

文献

- 戴学稷(1981):『呼和浩特簡史』、商務印書館
- 丹昌国主編(1994):『呼和浩特回族史』、内蒙古人民出版社
- 胡華穎(1993):『城市 空間 社会——広州市内部空間分析』、中山大学出版社、p.137
- 胡兆量、福琴(1994):北京市人口の圈層変化、城市問題、4、pp.42～45
- 呼和浩特市地方志編修辦公室:『呼和浩特市志』(1999年版)、内蒙古人民出版社
- 林幹(1993):『中国北方古代民族史新論』、内蒙古大学出版社
- 劉蒙林:「綏遠城滿族人口演變概略」(『呼和浩特文史資料』第10巻)、内蒙古檔案局
- 寧越敏(1984):上海市区商業中心立地的研究、地理学報、39、pp.163～172
- 寧越敏、鎧永成(1996):上海城市郊外化研究(李思名、鎧永成、姜蘭虹、周素郷主編:『大陸区域經濟發展面面觀』、pp.129～154)、国立台湾大学人口研究中心等
- 榮祥、榮庚麟(1981):『土默特沿革』、内蒙古人民出版社
- 阮西湖主編(1991):『都市人類学』、華夏出版社
- 佟靖仁(1992):『呼和浩特滿族簡史』、内蒙古大学出版社
- 王俊敏(2001):『青城民族』、天津人民出版社
- 吳郁文(1988):広州市城区の零售業、商業、企業立地的研究、地理科学、8、pp.208～217
- 徐放(1984):北京市の商業服務地理、經濟地理、1、pp.40～46
- 許学強、胡華穎、葉嘉安(1989):広州市社会空間構造的因子生態分析、地理学報、44、pp.385～396
- 薛鳳旋(1996):『北京——從伝統国都到社会主义首都』、香港大学出版社、p.369
- 虞蔚(1986):城市社会空間構造的的研究和計画、城市計画、6、pp.25～28
- 趙国鼎(1985):「我的經歷見聞」(政協内蒙古自治

区委員会文史資料委員会編、『内蒙古文史資料』第31卷)、内蒙古档案局

政協回民區委員會編：『呼和浩特回族史』(1994年版)、内蒙古人民出版社

中国城市地圖集編輯委員會(1994)：中国城市地圖集(上冊)、中国地圖出版社

周春山(1996)：『改革開放以來關於大城市的
人口分布和居住地移動的研究——以廣州市
為例』、廣東高等教育出版社、p.236

周一星、孟延春(2000)：北京的城市郊区化
及其对策、科学出版社

周一星、孟延春(1997)：瀋陽的郊区化——
兼論中西方郊区化的比較、地理學報、52、
pp.289~299

近藤富城(1996)：「清代歸化綏遠都市區の形
成過程」(『蒙古學信息』、1996年第1期)

(きゅう しゅうほう 神戸大学・院)